

# 勝林寺々報



## 「月愛三昧」

この「月愛三昧」ということは、『涅槃経』に出てくることばです。そのお経のなかでアジャセ王の物語をのべたところに出てきます。

アジャセ王は王舎城の王様ですが、ダイバダツタという人物にそのかされて、実の父親であるピンバサラを殺害して王位を奪つたわけではなく、生みの母親までも半に幽閉し、先のダイバダツタと共謀してお釈迦さまの教えに對抗した人物です。(この王舎城の事件をイダイケを主人公としてえがいているのが『無量壽経』です)

親鸞さまはこのアジャセ王の行状をのべた『涅槃経』の部分で、長々とその著書(「教行信証」)のなかに引用しておられます。

「人ごとではない、昔しはなしではない。このアジャセを見本に出して、親鸞よお前も同じではないかと私に問いかけてくださったついでだ」とつぶやきながら親鸞さまはこの物語りを読んでおられるのです。

さてそのアジャセですが、父の王がなくなつたと聞いて、さすがに悔恨のところにさいなまれます。その心の病から激しい熱病にかかり苦しみます。心身の病に七転八倒、あらゆる医療あらゆる教えをむさぼるように遍歴します。そのアジャセに対して釈迦如来の言い出されたことば、

「われ、アジャセのために 繫に入らず」  
如来は、如来から最も遠いところで苦悩しているアジャセ・五逆の罪人・一切凡夫人のために

にこそあるのである。アジャセをひとり苦悩のなかに置いて、なんで私がほとけになれましようか。

お釈迦さまご自身そういう思念を一心にこらされるとき、おのずからその御身より月の光のような清らかな浄かな光が放ち出されました。その月の光を「月愛三昧」とよびます。

この清浄な光は、ウバラ華というはすの花をいつせいに開花させます。道行く旅人のところに飲こびをわきたたせませす。

この「月愛三昧」の清浄光につつまれたアジャセ王は仏道にこころをむけます。

ギバという仏教信者の大臣にすがります。「ギバよお願いだ。おれのそばに来てくれ。お前の象にいつしに乘せてほしいのだ」

清浄光明ならびなし

このご和讃をうたわれたとき親鸞さまの胸に「月愛三昧」の光が照りかややいていたことでしょう。

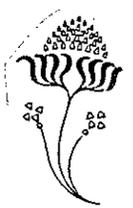
康弘くん 「初参式」 おめでとう

正法寺の教森元博・恵子さんの長男 教森 康弘くん

の「初参式」が十月六日勝林寺本堂においとおごそかに行なわれました。住職・坊守・ご両親そして祖母敏子さんに囲まれて記念撮影もいたしました。ほく、如来さまの子どもの仲間入りしました。どうぞよろしく。



## 秋



「少年老い易く学成り難し。一寸の光陰睡んずべからず。」  
子どものころおぼえた朱熹という人の詩です。

「いまだ覚めず池塘春草の夢。階前の梧葉すでに秋声」

池のつつみにもえたつ春の草に背春の夢をみたのはいつのことでしたしょう。ふと気づいてみると我が身の足もとには、はらはらとおおぎりの桐一葉、ちよう落の秋がしのびよつてきているではないか。

それ秋も去り春も去つて、年月をおくることきのうも過ぎ今日も過ぎ。いつの間にかは年老のつもるらんともおぼえず知らざりき」  
迎如さまも、あまりにもめまぐるしくまたたく間に過ぎ去つた六十年七十年の生がいに、今さらながら驚きをたてられるのです。

「一生過ぎやすし」  
過ぎやすき人生のはてに、はたして人と生れて一学は成つたか。人生の人と生れた生きがいをはんとうにつかめたのか。このいのち果ててののち、いのちの帰るべきところが見えてくるのか。

生の依るところ死の帰るところが見えて、それで残りのいのちを輝かしく、一葉一葉うつくしいもみじともえて、安らかな夕陽のなかで故つていくことができるのだろうか。

南無阿彌陀仏のお念仏は如来さまのおよび声です。「畢竟依を帰命せよ」と親鸞さまはおすすめてくださいます。

生きる依りどころ、死してついに帰るべきところ、それが南無阿彌陀仏の如来さま。

南無阿彌陀仏は、いつでも聞いているのだよ、どこでも見ているのだよ、だれにでもついているのだよと。だからそのを終の依りどころにし、しっかりと強く輝かしく生きるのだよ、真実の世界からよびかけてくださる名ものり・さけびが南無阿彌陀仏のお念仏なのです。

ちよう落の秋が、しかしお念仏のなかではみのりの秋とならねばなりません。

(勝林寺テレホン法話)

## 十一月のこよみ

- 一日 豊岡教区定例布教
- 二日 光通寺講堂・要講師
- 三日 同・全国仏教社年大会・中西正氏墓参
- 四日 木村勇氏法事・森井実氏法事
- 五日 兵坂町公民館老人大学講師
- 六日 基幹運動本部専門部会(本山)
- 七日 兵庫教区教化主任研修会(神戸)
- 八日 久如光蓮寺要講師
- 九日 同
- 十日 「おみがき」奉仕
- 十一日 勝林寺要講師
- 十二日 勝林寺要講師・福成寺要講師
- 十三日 福成寺要講師
- 十四日 久美辰良明寺要講師
- 十五日 本願寺派宗公議員選挙
- 十六日 宗門立門修学校前和教育研修会講師(京都)
- 十七日 同・高福寺要講師・奥地家百ヶ日
- 十八日 正福寺要講師
- 十九日 同・宮崎弘氏法事・宮崎幸彦氏法事・西方寺報
- 二十日 江原本行寺要講師
- 二十一日 「みのりを聞く会」・佐田要講師
- 二十二日 奥栗尾 要講師
- 二十三日 玉井克弥氏法事
- 二十四日 口栗尾要講師
- 二十五日
- 二十六日
- 二十七日
- 二十八日

## 案内

十一月十四日 夜七時半  
十一月十五日 昼十一時  
ご講師 榎本 義俊 師  
いつもの通り仏社から送迎バスが出ます。さそい合つてお参り下さい。詳しい案内は後日



私のお念仏



社会員 宮嶋 千秋

人生には「波」があるとよく申します。自分の目に見える「波」と全く目には見えない「波」があるように思います。草や木が枯れて生れかわること、古いものが姿を消して新らしくなること、お金持ちになつたり貧乏になつたり、元氣なからだでも病氣になつたりいろいろとあります。

私には全く想像もできない「波」がどんなものにもつきまといつていようと思ひます。元氣な人がいつまでも元氣とかがりません。立派な人であつても、ひよつとしたはずみでとんでもないことをしてしまうかわかりません。いや、人ごとではありませんが、私がいま突然のちを失なつたらどうなるであらうかと、この年齢になるとフト思ふようになりました。私にはまだまだやりたいことがいっぱいあります。家族みんながもつとほんとに安心できるような環境づくりをしておいてやらねばなりません。思われること、したいことなど山ほどあります。

ほとけさまが教えてくださる「諸行無常」ということのなかで、いつ変わるか知れぬいのちをしかし今日生きていよう、いや、おすくいのなかで生かさせていたよいていよう有難さがしみじみと思われまふ。子どもが悪いことをしたとき厳しく注意をしますと、「今の社会が悪いんだ」と、自分をかえりみることをしないで社会のことばかり申します。その社会を作りあげている自分にも責任があるように思います。いえ若い者ばかりではありません。私だつて「自分はいつもいい悪いのは人や社会」といつも責任のなすりつけあいをしていようと思ひ恥かしいことだと思ひます。仏教のほんとおしえを、もつと自分のものにしたかと思ひます。

世のなかには一人で歩けない人、一人で食事のできない人、一人で用がたせない人、まだほかにも眼のみえない人など、お困りの方が大勢いらつしやいます。ほんとに私もそうなのですか。自分一人では一日も生きることはできません。私は自分一人ではどうにもならず阿彌陀さまが体を動かしてくださり、知恵もつけてくださつていて、一人前のような生きかたをさせていたよいておひます。

自分をたすけてくださる人、自分をお世話してくださる人は、みんな阿彌陀さまのお光のなかの私の「きようだい」さまだと、あらためて合掌せざるをえません。今年も報恩講をおつとめします。ご祖先が、なんとしても伝えたいとおひのりを残していつてくださりました。その思いを私たちもまた次の世代へ伝えたいものだと思ひます。今年も、報恩講を通していつをう意義ぶかひものにしたかと思ひいつばいでございませう。南無阿彌陀仏

ちからなく おぼつかなくて 歩む われも 弥陀のすくいのみ光りのうち

十月二十八日「例年の通り」別修報恩講には 恩 招待のお年寄り五十二人仏壇会員四十七人その他 の参加者を含め百人を越す参拝者であつた。ご院長様 の法話・法縁浪曲幻燈「慈母観音」・仏壇会員の 修 老 アトラクションなど秋の夜長も忘れておひのりの中で 別 敬 の老若交歓のひとときでした。

子ども孫のみな様とも、そして幼いときからむつみ合つた私たちとも、「俱会一処」、ともにふたたび相い会えるお念仏のなから、どうぞ見つめ、願ひ、お呼びつづけてくださいますことを念じて弔辞といたします。 昭和六十年八月十八日 同じ村、幼な方たち、そして同じ仏社会員。 その罪愆での弔辞でした。胸せまる思ひでした

衆流の万川も 海に入れば 一味。 一つ親のよび声のなかのきようだい(御同朋)のよろこび。

人のいのち、電光朝露と聞いてはいましたものの、いままのあたり、しかもこの身のすぐそばで、またたくまの間に、息絶えた友〇〇くんの逝去にあい、ぼろぼろおのれを失つて、いま言うべきことばもありません。なぜ、つい三日前、盆おどりのやぐらを二人して組んだとき、あんなににぎやかにたち働いていた〇〇くんが、どうして今、はりきつたあの声を出してはくれないのでしよう。どうして、あのいつも心やさしく妻・子・孫たちとにぎやかにむつみあつていたあの父親〇〇くんは、突然どこへ行つてしまつたのでしようか。

しかし私たち、どんなにあわてふためきどんなになげきもたえようとも、ここにこうある現実を交える力は私にはありません。何か私には知られない大きな大きな厳しい現実の前に、どうしてみようもない人間の力の小ささを思ひ知るばかりであります。

いしば〇〇くんの今度のことは、日ごろ年ごろ「おおどうなくらし」しかしてない私への、長い友情からの最後のたしなめ戒しめであつたのだと受けとらせていたよよりほかありません。

露の世は 露の世ながら さりながら 涙のおさえきれない私たちです。 今ほど、お浄土へおかえりになつたあなたの声を、お念仏のなかに聞かせていただくばかりです。 あとへ残られた年老いられた母君とも奥様とも

おみがき奉仕を 勝林寺の「報恩講」(十一月十四・五日)を前にして、例年通り「おみがき」の奉仕をしたかと思ひます。ご都合のつく会員の皆様、ご協力ください。 十一月十一日 夜七時より 御同朋の社会をめぐして

「憲法」ではすべての人権主張の前提条件としての「平等権」をうたいあげておひます。その「憲法」が施行されてから四十年。その間いろいろと法律や行政や教育の面で差別をしないよう人権が互いに尊ばれるよう施策が行なわれてきました。たしかにその効果は見るべきものがあります。

しかし悲しいことですが、外にあらわれている面ではいかにもきれいな面ではまだ根づきませんが、人目からかくれた面ではまだ根づきく差別は残つています。それがたとえ結婚などについての身元調査などにふき出てきます。最近では匿名投票や落書きなどという極めて陰湿なかたの差別がむしろ多発しています。

「同じ一つ親に呼ばれているものはみなきょうだい」とお念仏のなかで生かされている互の人間関係を、むしろもつたないご縁といたただかれたのが私たちの親鸞さまです。親鸞さまはまた、差別をつくり出していた当時の天皇などの権力と徹底してたたかわれた方です。

本願寺のご門主様はかねてから宗門の目標として「御同朋の社会をめぐして」をかかげてお念仏行者の道を指示してくださつていました。 「部落解放基本法」制定要求運動の先頭に立つて、部落差別をはじめとする一切の差別を、私たちの社会からなくそうと呼びかけてくださいます。 お念仏よろこぶなかに差別はあつてはなりません。 「部落解放基本法」要求の署名に、ご家族全員ご協力ください。